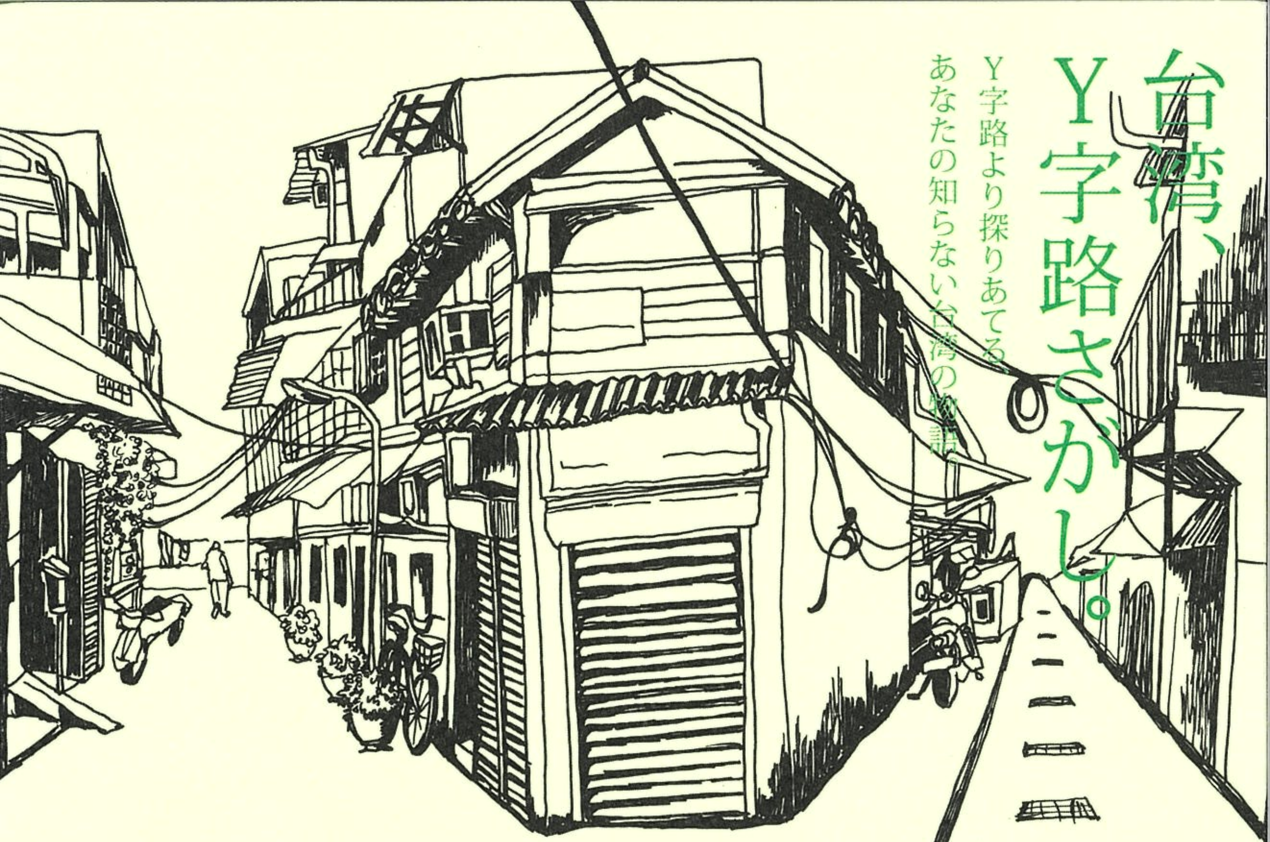


台湾、Y字路さがし。

Y字路より探りあてる、あなたの知らない台湾の物語。

在台灣尋找Y字路

「這麼多樣性的路口，給了我們一個『新舊並存』的啟示！」

—— 青田七六文化長水瓶子　專文推薦

栖來光

栖來ひかり Sumiki Hikari

譯—邱函妮

從京都到台灣，從台北到新北、新竹、台南、高雄，尋訪四十五條台灣Y字路風景，感性觀察，理性探索，揭開其古老身世之謎。

推薦序

Y字路述說台灣的故事

水瓶子

到日本旅行，喜歡到老喫茶店喝杯咖啡休息，觀察剛開店時老夫婦的不用言語、彼此分工的態度，把燈箱、菜單架子推出去，打開窗戶後準時地把開業的木牌面向門外。Y字路喫茶店的糖罐、杯子，雖然很陳舊，但是透過光線折射，不同角度看都有不同的風情。來用餐的常客顧自地看著店內書櫃的漫畫，一切都不用多言，大家一起享受著這共同的空間。

關於「Y字路」，在台灣人的印象中，大部分是用「三角窗」來形容位於街角的商店。看完了這本書，很難想像作者從日本來到台灣，才居住了十年。生活在台北的我們，看著每天經過的「三角窗」，漸漸從兒時的「柑仔店」轉變為「便利商店」，或許會有母親與老闆娘在「亭仔腳」聊天的記憶，但從來沒想到曾經有小水圳、土地公廟，甚至是舊鐵道的遺跡。

栖來光從老地圖中扮演柯南的角色，在現代都市叢林中尋找歷史的蛛絲馬跡，每一個Y字路好像活起來跟我們述說當地曾經發生的故事。這本書很值得拿在手上，到某一個「Y字路」仔細地對照老地圖，回顧此地所發生的故事。

東山彰良的《流》，對於台北老城區這個場景，放入了因為終戰後

Y字路が語る台湾のはなし

水瓶子

日本に旅行にいき、古い喫茶店にはいって一息いれる時間が好きだ。あるときY字路に立つ喫茶店を通りかかると、老夫婦が黙々と分担しながら開店の準備をしていたので観察してみた。電飾スタンドとメニュー看板を表にだして、雨戸を開ける。時間ぴったりに「休憩中」の木の札が裏がえる。

砂糖入れやグラスは、かなり年季がはいっている。とはいえ、鋭角の窓から差しこむ光線の屈折具合にあわせ、からだの位置を変えれば違った風情がみえてくる。常連客は店内の本棚にならぶマンガ本を読みふけり、不要なおしゃべりはいっさい無い。しかし誰もがこの空間をエンジョイしている。

「Y字路」という言葉は、台湾人の印象に即していえば、商店街の「三角窓」といった形容のほうが、通りがいいかもしれない。この本を読み終えて、作者が日本から台湾にきてたった10年、というのが信じがたかった。台北で生活していれば、毎日のように「三角窓」を通りすぎる。「三角窓」といえば、子供のころは駄菓子屋で今はコンビニになったあの角、あるいは母親と店のおかみさんがお喋りに興じていた古いレンガ状アーケードの角といった記憶はあれど、まさかそれが小さな水路や、氏神様の社や、古い鉄道の名残とは思いもよらなか

來自各地的人，提醒我們必須更深刻地面對歷史；吉田修一的《路》，在高鐵現代化建設的過程中，說出了台日三個世代的糾葛；我想這本書將會是一個起點，讓我們更珍惜這座城市的發展，珍惜地理環境，反省我們到底要留給後世什麼樣的城市？

人生往前走非常容易，但回頭咀嚼當中的酸甜苦辣，的確非常不容易！

我們的城市目前也在開發路上面臨了「Y字路」抉擇；對於到底是要全部拆除、還是全部保留，向右走或向左走的難題，台灣獨特地經常用「火」來解決問題，或許哪一天書中的「Y字路」也會逐漸消失，但這樣多樣性的路口，是不是給我們一個「新舊並存」的啟示呢！

（本文作者為青田七六文化長）

った。

栖来ひかりさんが古地図のなかで演じてみせるのは「名探偵コナン」の役だ。現代の都市ジャングルの中から蜘蛛の糸のように細い歴史の痕跡をたぐりよせる。各々の「Y字路」は生きているかのごとく、その地で起こった出来事を語りかけてくる。この本を手にどこかの「Y字路」に立って、古地図と照らし合わせながら、そこで生まれた物語に耳を傾けてみればどんなに楽しいか……。台北の古いエリアを舞台に、終戦後に各地から台湾にやってきた人々を役者に仕立て、ぼくらのきた歴史と深く向き合った東山彰良の『流』。吉田修一の『路』は、現代の台湾高速鉄道の建設過程のなかで、日台における三世代のもつれを描きだした。そしてこの『台湾、Y字路さがし。』は、地理のもたらす環境に配慮しながら街の発展を熟考し、次の世代にどんな街を残せるかを考えるためのスタート地点となるだろう。

人生をまえに進めるのはわりと簡単だけれど、かつての酸いや甘いをわきまえるのは、確かに容易なことじゃない。

ぼくらの街が発展してく途中の「Y字路」で直面する二者択一とは、つまりそれを全て取り払ってしまうのか、まるごと残すのか、右に行くか左に行くかという難題だ。台湾で昔ながらに用いられてきた「火」で燃やし尽くして解決するのか。本に出てきたようなY字路もいつか全部、消えうせてしまうのか。しかし、こんなに多様性をもった面白い街角を失ってしまっていいものか。

それは未来における「新旧混在」というあり方について、Y字路がぼくらに与えてくれるヒントといえそうだ。

（青田七六文化長）

作者序

在台灣尋找 Y 字路

若說發明「Y 字路」這個名詞的是日本代表性平面藝術家──橫尾忠則，應該是毫無異議吧！橫尾忠則的「Y 字路系列」，是以故鄉的 Y 字路風景為主題，並混雜了過去、現在、未來、幻想與現實的系列作品，充滿魅力，也是我十分喜歡的繪畫作品。我的第一本書《在台灣尋找 Y 字路》得以出版，要感謝創造出「Y 字路」概念的橫尾忠則。首先，我要以心電感應的方式，將發自內心的感謝與尊敬，傳送給橫尾先生。

我對 Y 字路最早的記憶，可以追溯至小學時期。當時，我住在山口縣山陰地方的小城鎮，正值 1980 年代的前半期，從明太子工廠排出有如鮮血般的紅色廢水，發散出腥臭氣味，直接注入河川。從學校返家途中，我會經過跨越有著明太子顏色的河川橋樑，那裡正是「Y 字路」的所在。然而，左右兩邊的道路，都可以通往位於高地且靠近海邊的家。

右邊的道路，是我上下課通學的必經之道，然而隨著年紀增長，結交了住在左邊道路上的同學。為了可以和同學多相處一會兒，有時我會經由左邊的道路回家，由於學校規定上下學的道路是右邊的路，因此往左邊走的話，總會感到一絲罪惡感！而且，往左邊回家的路上，會經過一段非常難走的陡峭坡道，讓我氣喘吁吁，甚至覺得心臟快要停止，也曾經被一群野狗追趕。即便如此，我還是經常偷偷從左邊的道路回家。

台湾、Y 字路さがし。

「Y 字路」という言葉を発明したのは、日本を代表するグラフィック・アーティストの横尾忠則氏というのに異論はないように思われます。横尾氏の「Y 字路シリーズ」は、氏の故郷の Y 字路風景を、過去・現在・未来・空想・現実とまぜこぜに描いた、魅惑的で大好きな絵画シリーズです。わたしの初めての著書として「台湾、Y 字路さがし」を出版できるのも、「Y 字路」という概念を生んでくださった横尾忠則氏のおかげです。まずは横尾さんに、心からの感謝と尊敬のテレパシーを送ります。

わたしにとっての Y 字路の最初の記憶は、小学生時代に遡ります。当時わたしは、山口県の山陰がわにある小さな町に住んでいました。時は 1980 年代の前半。明太子工場から出る鮮血のように紅く生臭い排水が、川へ流れこんでいました。学校からの帰り道、明太子色した川にかかった橋を渡ったところが「Y 字路」でした。左右どちらの道を進んでも、海に近い高台にある我が家までたどり着くことができました。

右は通い慣れた通学路でしたが、学年があがり、左の道を途中まで共に帰る友人ができました。少しでも長く一緒にいたくて左から帰りたい。でも学校の定めた通学路は右の道だったので、左をゆくのに罪

去程開心，歸途卻感到害怕。要往右邊走？還是往左邊走？

這是我的「Y字路」原始風景，二十幾年後再回到童年居住的城鎮，河川已看不見明太子色調，印象中距離遙遠的學校，實際上也不太遠。

回首過往，我曾經遇見無數的Y字路，必須選擇要往左還是往右。十年前，我也面臨人生重要的Y字路，後來由於結婚的緣故，我選擇了通往「台灣」的道路，在這之前，從未想到有一天會定居在台灣。

如今，我在台北住了十年。這段期間，街道的樣貌一點一滴地改變，有許多東西消失，又出現新事物。然而，卻沒有人留意消失的事物。好像從一開始就不存在的樣子，他們只是漠然地從旁經過。

台北留下許許多多的Y字路。藉由對照以前的地圖，可以了解到Y字路的形成過程，並且挖掘出埋藏其中的故事，當我意識到這一點時，台北的街道，便突然從原本尋常的三度空間，變成四度空間，宛如戴上IMAX電影的3D眼鏡一般，原本早已遺忘卻埋藏其中的「消逝的時光」倏忽出現，歷歷在目。從那天起，我開始著迷於尋找Y字路，雖然不是捕捉寶可夢，然而我卻像在捕捉Y字路般地穿梭於台北的大街小巷之中。

這本《在台灣尋找Y字路》，是我「Y字路GO」的台北生活集錦。在我所遭遇的Y字路上，我聽見了台北的各種聲音，清代、日本時代、戒嚴時期以及屬於我的回憶。在不同的頻道之間，我一邊調整調諧器，一邊將我所聽到的聲音記錄下來，並透過混音處理，完成了獻給台灣的情歌。

悪感がいつもありました。そのうえ、左から家にたどり着くまでは、右から帰るよりもずっと過酷な「心臓破りの坂」がありました。野犬の群れに追われたこともあります。それでもよく、こっそり左側を選んで帰りました。

行きはよいよい、帰りはこわい。右に行こうか、左にいこか？

これがわたしの「Y字路」についての原風景です（20年ほど後にふたたび町を訪れましたが、すでに川は明太子色でなく、遠いと思っていた学校も印象ほどに遠くはありませんでした）。

思えばこれまで、無数のY字路にさしかかり、右か左かを選んできた気がします。10年前も、わたしは大きなY字路に立っていました。そして結婚という事件に背中を押され、「台湾」に繋がる道のほうをきました。台湾に住むようになるとは、それまで思ってもみませんでした。

それから台北で過ごした10年のあいだ、街はすこしずつ姿を変えました。沢山のものが失われ、生まれました。消えたものに注意を払う人はいません。ずっとまえから存在しなかったみたいに、ただ前を通りすぎていきます。

台北には沢山のY字路が残っていました。昔の地図と照らしあわせてY字路の成り立ちを知ることで、埋もれた物語が掘り起こせることを発見したとき、普通の三次元だった台北の街が突如、「失われたとき」を帯びた四次元的なものとして立ち現れてきました。まるでIMAXの立体眼鏡を手に入れたみたいに。その日から、Y字路探しに夢

這本書的出版要感謝協助中文翻譯的邱函妮女士，以及給我許多意見的作家水瓶子先生，協助日語校對的田中美帆女士，一直替我打氣加油的家人與朋友，研究台灣文獻的前輩與學者，給我出版機會的玉山社魏淑貞女士、蔡明雲女士等人，在此誠摯地致上我的感謝之意。

2016 年 10 月 10 日　栖來光

中になったわたしは、ポケモンならぬ Y 字路を捕まえようと、台北じゅうを歩きまわりました。

この『台湾、Y 字路さがし。』は、わたしの「Y 字路 GO」な台北生活の集大成です。みつけた Y 字路で台北のいろんな音を聞きました。清代。日本時代。戒厳令時代。わたし個人のおもいで。いろんなチャンネルにチューナーを合わせながら聞こえてくる音を書き留めてミックスしたところ、できあがったのは台湾へのラブソングでした。

この本の出版にあたり、中国語翻訳の邱函妮さん、様々な助言をくれた作家の水瓶子さん、日本語の校正を手伝ってくれた田中美帆さん、応援してくれた家族や友人たち、そして台湾に関する文献を残してくれた沢山の先人と、出版の機会をくださった玉山社の魏淑貞さん、蔡明雲さんに、心よりの御礼を申し上げます。有難うございました。

2016 年 10 月 10 日　栖來ひかり

台北市同安街 28 巷 × 牯嶺街 95 巷

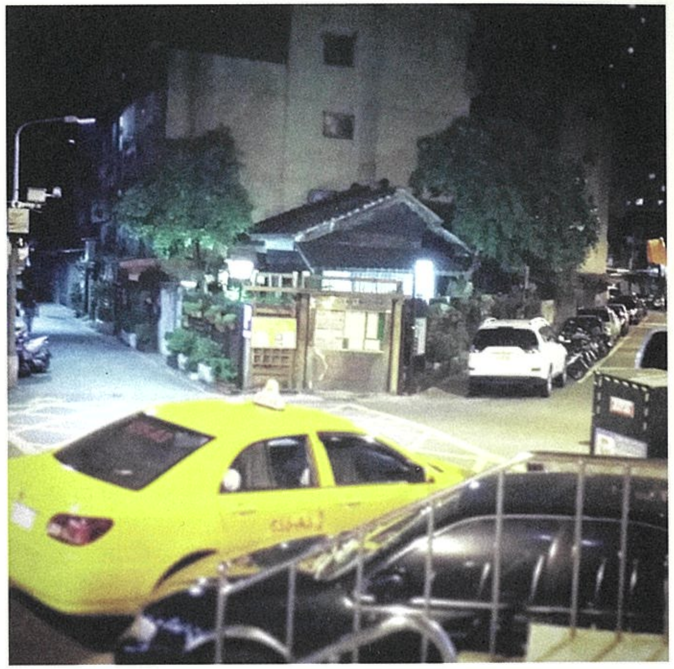
往右？往左？

右か、左か。

在探訪台北各處的日式老房子時，讓我發現到台北有許多「Y字路」（三岔路口，或者有更多條路交會的路口），也令我暗自忖度這應與清領、日治及中華民國各時期的都市計畫有關，在這裡面應該埋藏了各自的故事。

「Y字路」總有種難以名狀的神秘氛圍，令人難以抵禦它的魅惑。禁不住「Y字路」的深深吸引，日本畫家橫尾忠則，即曾以「Y字路」為主題，創作了一系列畫作。

信步走在街道巷弄中，「Y字路」乍然露出臉來，強迫我於「往左」和「往右」之間做出選擇；在左邊或右邊道路的盡頭，似乎隱藏著什麼。想著這選擇將對我人生帶來或大或小的變化，不禁心情忐忑、腳步猶豫，而「Y字路」卻用一副事不關己



台北にある和風古民家日式木造建築の取材をしているうちに、気づいたことがある。台北には三叉路、もしくはそれ以上に枝分かれし鋭角になった交差点である「Y字路」が多い。どうやら日本統治時代以前→日本統治時代→戦後（中華民国政府時代）と大きく変遷した政府の都市計画と深くかかわっているみたいだ。美術家・横尾忠則氏の故郷、兵庫県西脇市をモデルにした「Y字路シリーズ」といい、Y字路ってやけに人を惹きつける。右奥に、あるいは左奥になにかが潜んでいる。何も考えずに歩いていたら、突然Y字路が顔をヌッとだして迫る。「右にいくのか、左にいくのか。」

その選択が人生にちいさく、もしくは劇的にもたらすかもしれない変化を想像して少しばかりおびえているわたしを尻目に、Y字路は何食わぬ顔をして、そこにいる。

このY字路は同安街を淡水河（新店渓）へ向って歩い

的表情瞅著我。

當我沿著台北市同安街往新店溪方向走時，這條Y字路忽然映入眼簾。當我查閱「台北古地圖（1930年版）」後得知，這條Y字路一帶（也就是現在牯嶺街95巷與同安街28巷交會處），確實曾有河川流過。此外，現在的汀州路，於第二次世界大戰前，則是連結新店與萬華的縱貫鐵路新店支線（俗稱萬新鐵道）。

將今日的地圖與上述古地圖兩相重疊後，發現牯嶺街95巷與當年流經此地的河川完全重合為一。

這條河川以前稱為「赤川」，水流清澈，夏日時節，川岸螢火蟲成群；直至今日，近鄰小學仍以「螢橋」為校名，不難想見當日美景。

「Y字路」正中央、燈火煌煌的日式老房子，現在是一家名為「野草居食屋」的和風料理店，過去是台灣大學陳玉麟教授的宅邸。在陳教授以此為家之前，則是遠自日本來到台北帝國大學任教的石井稔副教授的住所。石井稔副教授當時將家裡後方的一畝田地，作為研究農藥的專用地，這片土地如今成為私立強恕高中的校地，往昔風貌不再。

走入同安街如迷宮般糾結交錯的巷弄，一陣濕潤的風吹拂過來，有那麼一瞬間，我彷彿聽見潺潺流水聲與不遠處傳來的氣笛聲。

將古今地圖重疊後，牯嶺街95巷與當年流經的河川重合。

古今の地図を重ね合わせてみると、牯嶺街95巷と当時の川の流れが重なりあった。

たところで出現した。

「台北古地圖（1930年／昭和5年版）」で調べてみた。

現在の汀州路には戦前、新店と萬華をむすぶ新店支線（通称：萬新鉄道）が走っている。

古い地図に現在の地図をかぶせると、みごとに牯嶺街95巷と川の流れが重なった（左ページ）

むかしここは赤川とよばれ、沢山の蛍がとぶ澄んだ川だったそうだ。今も付近に「蛍橋」という名前の学校が残っていることから、当時の風景のうつくしさをうかがい知ることが出来る。

Y字路の真ん中で灯りを点している和風古民家は「野草居食屋」という和風料理屋で、昔は陳玉麟という台湾大学の有名な教授の住まいだったらしい。

陳教授の前に住んで居たのは、台北帝国大学の助教授として赴任してきた日本人・石井稔助教授。石井氏が農薬研究のため畑にしていた家の裏は、私立の強恕高校に変わりその面影は今はない。

台北の湿度の高い風に吹かれながら、迷路のように入り組んだ同安街の小路をあてどもなく歩いてみた。

一瞬、川のせせらぎと汽笛が聞こえたような気がした。

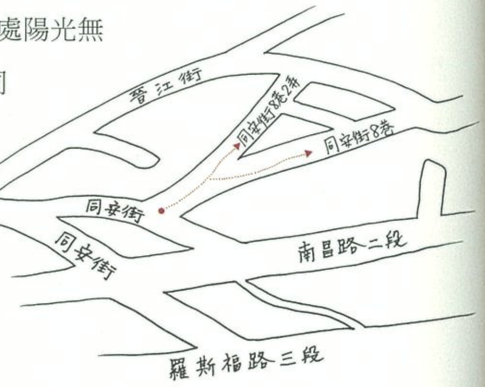
台北市同安街 8 巷
×
同安街 8 巷 2 弄

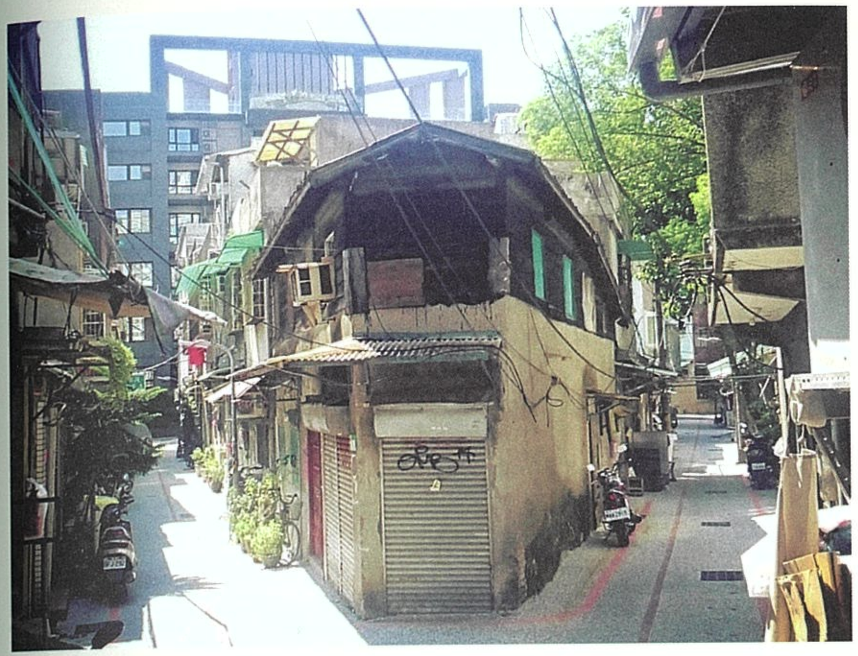
夢之Y字路

夢のY字路

有這麼一說，「古亭」的地名是由「鼓亭」轉變而來。清代，這裡是由福建泉州安溪人所開墾的地區，由於害怕被住在新店山區的原住民泰雅族獵頭，而蓋了「望樓」，以監視其動靜。當有狀況時，看守望樓的人會鳴鼓通知，因此，望樓又稱為「鼓亭」。

查看 1927 年的地圖，會發現沿著南昌路的水路，在同安街入口處左彎，有如弓箭一般，再度返回南昌路。由於曾經是水路，走在這裡，我感覺自己有如身處陽光無法穿透的海底的深海魚，在迷宮般複雜的同安街上游來游去；突然間，就與這條 Y 字路相遇了，而照片右側的「同安街 8 巷」，也曾經是水路。順道一提，沿著這條水路往前走所碰到的 Y 字路（兒玉町四丁目），曾經是兒玉源太郎的別墅「南





一説によると「古亭」という地名は「鼓亭」が転化したものらしい。清の時代、福建泉州安渓の人々によって開墾されたこの地域だが、常に新店方面の原住民タイヤル族による首狩り（出草）の不安にさらされたことから「望楼（見張り台）」が作られた。望楼では敵の襲撃を知らせるために太鼓を鳴らした。そんな訳で、その見張り台を称して「鼓亭」と呼ぶようになったという。

1927 年の地図では、南昌路沿いに走っていた水路が同安街の入り口から左に折れ曲がり弓矢のようにふたたび南昌路に戻る。この水路の存在のおかげで迷路のごとく複雑に入り組んでしまった現在の同安街を徘徊する。光

菜園」。

　而羅斯福路靠近同安街入口處，則有間黑漆漆的大廟，名為「古亭地府陰公廟」。這裡是俗稱的「陰廟」，源自於「孤魂信仰」，相當於日本的「御靈信仰」，也就是藉由祭祀橫死的怨靈，以避免其作祟或者想借助其力量的民間信仰。這間陰廟因主要是祭祀未婚女性，又被稱為「姑娘廟」。此廟建於 1885 年左右，當時據說與一般陰廟一樣，是間小小的祠堂。

1927 年的地圖
1927 年の地図

　2015 年獲得直木賞的台裔作家東山彰良，即在《流》這部小說中提到主角的祖父，曾經在「中華商場」中建了一座祭祀狐靈的陰廟。與一般的廟不同，有許多人會在陰廟許下一些「負面」的願望，例如在賭博中獲勝、報復，甚至祈求讓某人陷入不幸當中等。如果願望實現，卻不回禮祭拜的話，有可能會遭遇災難。

　回禮祭拜，除了拿香祭祀之外，也包括修築廟宇，主要是依實現願望的大小而定。一百年前

も届かぬ深い海の底をユラユラとおよぐ深海魚の気分である。そうして遊泳しているうちに、Y 字路に出あう。夢にいつか出てきたかのような理想の Y 字路だが、かつての水路が覆われて「同安街 8 巷（前ページ写真右の道路）」と成ったことで出来らしい。ちなみに、その水路が延びた先の Y 字路部分（児玉町四丁目）にあったのが、児玉源太郎の別荘「南菜園」である。

　ところで、羅斯福路の同安街入り口あたりに「古亭地府陰公廟」という名の黒っぽく大きな廟がある。俗に「陰廟」と言われ、もとになっているのは「孤魂信仰」で、いわば日本の「御霊信仰」にあたる。つまり非業の死を遂げたり怨みを持って死んだ人の怨霊を崇めることで災いから逃れたりその力を借りたいとする民間信仰なのだが、ここの陰廟のように、未婚の女性を祀った廟を特に「姑娘廟」と呼ぶらしい。建てられたのは清光緒 11 年（1885 年）頃とも言われているが、その頃は一般的な陰廟と同じく小さな「ほこら」だったそうだ。

　2015 年に直木賞を受賞した台湾出身の作家・東山彰良の『流』という小説の中にも主人公の祖父が狐の霊を祀った陰廟を建てる話があるが、陰廟の特殊性はギャンブルに勝つ・仕返し・誰かの不幸を望むなど「負」の願いごとが多いところにある。そして願いが叶った暁には必ずや「お礼参り」をしなければ、祟られるとも言われる。

　お礼参りは線香をあげるのから廟の改築まで、成就し

還是一間小小的祠堂，現在變成如此大規模的廟宇，可見參拜者「願望」實現的成果；這麼一想，不禁令人感到有些毛骨悚然。

從這間陰廟所在地的羅斯福路，往緩坡道的同安街下坡走去，越過之前的鐵路（現在的汀洲路），就來到了從前稱為川端町的淡水河新店溪畔。戰前，這裡一到週末，就有許多人來到河邊戲水，十分熱鬧；溪畔有一間「紀州庵」，是紀州（和歌山縣）出身的平松一家於西門所開料亭「平松家」的分店。

戰後，「紀州庵」被中華民國政府接收，成為公務人員、國營事業職員家庭居住的集合宿舍。台灣的知名小說家王文興也曾住過這裡，其代表作《家變》，就是以同安街為舞台所書寫的小說。

「紀州庵」原本分為本館、別館、離屋，但是本館與別館因火災燒毀，僅剩下離屋，經修復後成為以文學為主題的「文學之森～紀州庵」中的主體建築，於 2014 年開幕。

這麼看來，同安街可說是過去與現在交錯的夢幻仙境。

然而，潛藏此處的並非永井荷風的「夢之女」，而是「夢之 Y 字路」。

た願いごとの規模によるようだが、100 年前はささやかだったこの廟が現在までの大きさになったのも、それほど参拝客の「願い」が成就した結果なのだ、と考えると何だかゾッとしなくもない。

この陰廟がある羅斯福路からゆるやかな下り坂になっている同安街を下り、線路があった場所（現在の汀州路）を越えると、川端町とよばれた淡水河新店渓にたどり着く。戦前は、週末になればそこで川遊びを楽しむ人でにぎわったらしく、渓畔には紀州（和歌山県）出身の平松一家が西門でひらいていた料亭「平松家」の支店、「紀州庵」があった。

戦後は中華民国政府に接収され、公務員や軍人家庭が暮らす共同宿舎となるが、台湾の著名な小説家・王文興もその頃ここに育ったひとりで、代表作である「家變」は同安街を舞台に描かれている。

本館・別館・離れと 3 棟あったうち本館と別館は火災で焼失し、残った離れは修復され、文学をテーマとした公園「文学の森～紀州庵」として 2014 年にオープンした。こうして見ていると、同安街は現在と過去の交錯するワンダーランドだ。そしてその中には永井荷風の「夢の女」ならぬ、「夢の Y 字路」がひそんでいる。

台北市連雲街
×
臨沂街 65 巷

民國 64 年的地圖

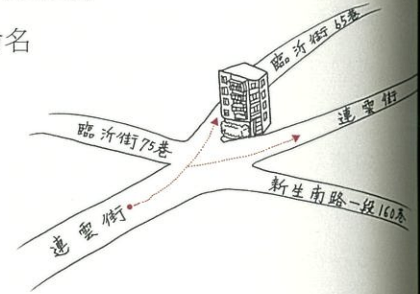
民国 64 年の地図

以小籠包聞名的鼎泰豐本店的所在地永康街，有許多日本觀光客都曾經造訪過，而這條 Y 字路，就在永康街往北、穿過信義路的巷子不遠處。

這附近一直到林森北路一帶的區域，日治時代以前屬於「三板橋庄」的南端。

「三板橋」的地名，源自於架設三塊木板跨越溪流以作為橋樑，而橋樑的架設地點位於「第二霧裡薛支線」的溝渠（從溫州街分流，經過永康街、臨沂街，往中山區的林森公園北上）、與現在南京東路的交會處。進入日治時期後，地區劃分改變，包含永康街的這一帶，被命名為「東門町」。

在 1930 年的地圖中，可以看到往北流的「第二霧裡薛支線」的溝渠，至於連雲街附近的街道，則是沿著水路沿線而形成的道路。



小籠包で有名な鼎泰豊（ディンタイフォン）本店があることから、日本人観光客の多くが一度は訪れたことのある永康街の、信義路を挟んで向かい側を少し入った場所にあった Y 字路。

このあたり、日本時代以前は現在の林森北路のほうに広がっていた「三板橋庄」という地域の南端に属していた。「三板橋」の由来は、かつて温州街から枝分かれし永康街・臨沂街を通って中山区の林森公園のほうに北上して流れていた「第二霧裡薛支線」という疎水と、現在の南京東路が交わる部分に三枚の板が通行用にかけられ

不過，到了戰後，日治時代的町名全面改變。

關於地名的命名方式，基本是將台北劃分為四區，並就各自的位置關係，縮小對應到中國的地名，這是由上海的建築師鄭定邦制定的，據說在上海也使用同樣的方式命名；這是為了讓在台灣出生的孩子，即使到中國，也不會對中國的地理感到陌生。從這一點來看，可以充分感受到當時的中華民國政府，對於「回歸大陸」這件事，有著強烈的執念，令人感到十分有趣。

在民國 64 年（1975 年）制定的中華民國地圖中，首都是南京，甚至連蒙古都被劃入疆界之內。與我同世代的台灣人，到高中生為止的階段，都接受了這樣的教育，也就是說，這只不過是二十五年前的事。對於身為日本人的我而言，看到現在台灣社會的自由民主，實在很難想像以往曾經有過這樣的歷史。

順道一提，連雲街的地名乃是源自於江蘇省的連雲，臨沂街是源自於山東省的臨沂。

臨沂街 65 巷 ×71 巷 19 弄的 Y 字路
臨沂街 65 巷 ×71 巷 19 弄の Y 字路

民國 64 年的中華民國全圖
民国 64 年の中華民国全図

ていたことから来ている。その後、日本時代に入って区分けが変わり、永康街も含めた一帯と共に「東門町」と名付けられた。

1930 年の地図に照らせば、北上していく「第二霧裡薛支線」疎水をみることができ、連雲街などこのあたりの道が疎水の流れに沿うように出来た道であることがわかる。

戦後になり日本時代の町名は全面的に改定される。

命名は基本的に、台北を四つのエリアにわけ、それぞれに中国大陸の地名を同じ位置関係のまま縮小して当てはめるという、上海から来た建築士・鄭定邦の編み出した方法で上海でも採用されているという。台湾で生まれた子供たちが、中国大陸に行っても地理に迷うことがないように。当時の中華民国政府の、「いつか帰る」という意思が強く感じられて興味深い。

民国 64 年（1975 年／昭和 50 年）作成の中華民国の地図では、首都は南京でモンゴルまで領土に入っている。これがほんの 25 年ぐらい前まで、つまり、1976 年生まれのわたしと同年齢の台湾人が高校生になるぐらいまでの普通の教育だったというのだから、日本人のわたしからすると現在の自由な台湾の姿からはにわかに信じ難いような話ではある。

ちなみに、連雲街は江蘇省連雲、臨沂街は山東省臨沂から来ているそうだ。

1930 年的地圖與現在地圖疊合
1930 年と今の地図を重ね合わせたもの

台北市齊東街 × 金山南路一段

華山1914的月亮

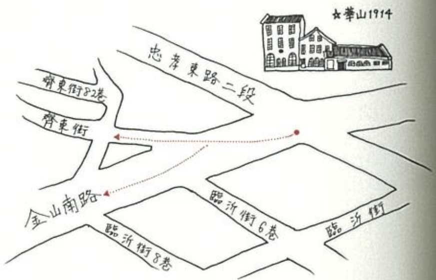
華山1914にでる月

從忠孝東路轉向金山南路，稍往南走，馬上就會看到這條Y字路。

站在對街看向這條Y字路，可見到「齊東老街」的標示，但是左方的高架橋、右側的停車場、後方的旅館，讓人彷彿身處在一片水泥森林中，感受不到一絲情調，不禁納悶：「到底哪裡是老街？」然而，往右側的齊東街稍往裡面走，映入眼簾的是黑瓦木造房屋，頓時讓人領會到老街的風情：「啊！原來如此。」

這裡的「齊東街日式宿舍」，別名為「幸町職務官舍群」，建於日治時期的1920年到1940年左右，由於靠近總督府，成為提供不同階級公務員專用的官舍。

2006年由台北市文化局指定為市定古蹟，也被指定為歷史建築。這群和風木造



忠孝東路から金山南路沿いを、南に歩いてすぐのY字路。

正面に「齊東老街」というサインがみえる。何しろ左は高架橋、右は駐車場、奥はホテルと、コンクリートばかりで情緒の微塵もなく、「どこが老街？」と首を傾げたくなる風景だ。だが右の齊東街を少し入ればすぐ、木造の家々を覆う瓦が視界を占拠して、「そうか、だからか」と納得するに違いない。

ここ「齊東街日式宿舍」は、別名を「幸町職務官舍群」という。日治時代の1920年から1940年に、総督府が近

三峽清水街 × 秀川街

頭尾都是 Y 字路

Y字路のあたまとしっぽ

走到三峽由清水街與秀川街構成的 Y 字路口，眼前矗立的是一棟側面描繪著五顏六色塗鴉（或者應該稱為街頭藝術吧！）的兩層樓建築，說實在的，我無法瞭解那到底想畫什麼？Y 字路前方，有隻正在激烈滾動的黑狗，可能是背上太癢了吧！真可憐。而當我將目光從黑狗身上移向左方，則見到搖曳生姿的柳樹，柳樹旁有一條大河，襯托著寬闊的天空。

三峽，日治時代以前稱為「三角湧」，如地名所示，這裡是三條河川匯集、水源豐沛的地方。由於適合栽種藍染原料「馬藍」，而且有充足的清水、以供洗滌剛染好的布，加上水運方便，因此這裡曾經是台灣藍染的中心，繁榮一時。完成的藍染布，除了銷售到鄰近的城鎮，如苗栗、新竹等客家村，也經由船運順

カラフルな落書き（ストリートアートと呼ぶべきか？）が施されているが一階部分で何を描きたかったのか全く意図不明の Y 字路の前で、黒い犬が猛烈にゴロンゴロンしている。背中が痒くて仕方ないんだろう、気の毒に。黒い犬から目を左に移動すると、柳の揺れる向こうにおおきな川と広い空が広がっている。

台北郊外にある三峡は、日本時代以前に「三角湧」と呼ばれたとおり、3 つの川に囲まれた水の豊かな土地である。藍染めの原料となる馬藍（マーラン）の生育に適

流而下，經過萬華（舊稱艋舺）的港口，運往遠方的廈門與上海。後來由於被化學染料取代，三峽的藍染產業在 1900 年到達頂峰之後便逐漸衰退。但是近年來，當地人士已開始致力於復興藍染這項文化遺產。

除了藍染之外，被讚譽為台灣版「聖家堂（聖家宗座聖殿暨贖罪殿）」的「祖師廟」，乃是由當地出身的藝術家李梅樹監造，廟中擁有十分具代表性的雕刻作品。此外，當地的茶產業也相當蓬勃，可見三峽一地擁有豐富的創造力。

近年來，更有出版《CAN~ 甘樂誌》（專門介紹台灣地方故事以及文化等的獨立發行雜誌）的「甘樂文創」在當地經營，還有漸次開設的美術工藝專門藝廊等，都令人感受到此地將擔負起傳承台灣文化重責的氣息。三峽可說是每次造訪都讓人期待會有新發現的地方。

從文章一開頭那個充滿五顏六色的 Y 字路口往前進，最後又結束於另一個 Y 字路。路口的這間「活力の屋」，因為當日店休，所以無法得知是什麼樣的店舖。雖然拉下的鐵門讓人完全無法感受到什麼活力，但我猜想大概是早餐店、還是飲料店吧？

し、染め上がった布をあらう清水に恵まれ、かつ水運の便が良かったこともあり、かつては台湾藍染めの中心地として栄えた。完成した藍染めの布は、一方は近隣の苗栗、新竹の客家の村へ、また一方は船に積まれて川をくだり台北萬華の港を経てとおく厦門や上海へとはこばれたという。その後、化学染料に駆逐され 1900 年をピークに衰退してしまった三峡の藍染め産業だが、近年は地元の人々が文化遺産としての復興に力を注いでいる。

藍染めの他にも、地元出身の芸術家、李梅樹が監督し台湾版「サグラダ・ファミリア」との呼び声も高い祖師廟に代表される彫刻や茶文化など、多様なクリエイティブの素地をもつ三峡。それを証拠に、台湾ローカルの物語や文化に特化したリトルプレス雑誌『CAN~ 甘樂誌』を出版する「甘樂文創」をはじめ、美術工芸専門のギャラリーが次々とオープンするなど、これからの台湾文化を担う息吹が感じられる三峡は、訪れるたびに新たな発見があって楽しみな場所だ。

最初の写真のカラフルな Y 字路をすすむと、また Y 字路になって終わっていた。閉まっていて何屋なのかわからない「活力の屋」。いかにも活力が出なさそうな佇まいだが、朝ごはん屋だろうか、それともドリンクスタンドだろうか。

新莊永寧街 37 巷 × 中華路一段 63 巷

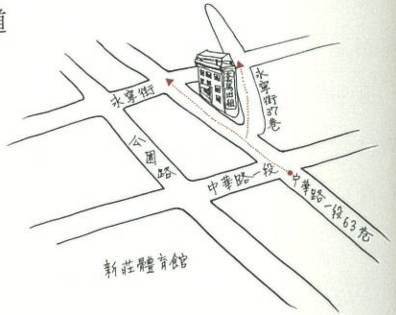
有套房出租的 Y 字路

Y字路の部屋貸します

「套房出租」。

沒有比這個更能彰顯「房東主張」的Y字路了。但是，如此強調這點，令人不禁感到擔心：「這裡真的這麼難租出去嗎？」但是反過來想，又令人湧現不安的情緒並產生疑慮：「這裡的房間到底是什麼狀況，才會這麼難找到房客啊？」假如我要找房子，看到這個Y字路上的廣告，恐怕猶豫到最後，還是會決定：「就算了吧！」

這棟位於Y字路口、掛有「套房出租」的建築相當狹長，令人好奇到底內部的隔間與格局為何？順道一提，建築物後方的牆壁（照片右方）沒有陽台，甚至也沒有透光的窗戶，室內應該十分陰暗，令人感到有些介意。



這裡是位於台北郊外的新莊。

從萬華渡過淡水河就是三重，再從這裡沿

「お部屋貸します」

大家の主張がこれ以上ないほどに表されたY字路。ここまで言われると「そんなに借り手がないのだろうか？」と心配になり、逆に「それほど借り手が居つかない様な部屋なのでは」といぶかしくおもう気持ちも沸き起こってきて、たとえばもし、わたしが部屋を探していたとしても「ここはやめておこうかな」という所に落ち着いてしまいそうだ。

かなり薄手の建築なので、物件の間取りがどうなっているかは非常に興味ぶかい。ちなみに建物後方にあたる右手の壁には、ベランダも、明り取りの窓さえも全くないところも気になる（だから中はかなり暗いのではないか）。

ここは台北郊外にある新荘。

萬華から淡水河を渡ると三重区、そこから大漢渓に沿って西に向かうと新荘区に入る。18 世紀以前は平埔族（へいほ・ぞく。台湾の平地に暮らした原住民で、高地に住んだ高砂族と区別して使われた名称）の中でも特にケタガラン族が暮らしていた地域で武勝灣社 (Pulauan) という集落があったが、清代以降は多くの漢人が流入して結婚

著大漢溪往西走，就進入新莊。18 世紀以前，這裡主要是平埔族，尤其是凱達格蘭族居住的地區，部落名為武勝灣社（Pulauan）；清代以後，有許多漢人移居此地，彼此通婚後，隨著漢化加深，部落因而消失。

「新莊」乃是「新興的街莊」的意思，此處鄰近河川，因水運而繁榮，曾經有詩讚道：「千帆林立新莊港，市肆聚千家燈火。」自漢人開墾以來，這裡也是北台灣最早開發的地區之一。後來，水運雖然被對岸的艋舺取代，但是清代後期曾有鐵道經過並在此設站，名為「海山口」，是鐵路交通的重要據點。與淡水河接續的大漢溪，原名「大姑陷溪」，是源自於泰雅族語中「大水」的意思；河如其名，這條河川經常氾濫。日治時期縱貫鐵路改道以後，新莊鐵路要道的地位轉讓給板橋，原本鐵道經過之處，現在為主要幹道「台 1 甲線」，後來周邊幾個區域整合成一個大工業區。

原名「大姑陷」的大漢溪，對於研究日本近代史的人而言，是耳熟能詳的詞彙，因為此地在清廷將台灣割讓予日本的 1895 年左右，是曾經遭遇住民激烈抵抗的戰場。

在《征台始末》（1897 年／明治 30 年出版）這本書中，詳細記載了當初日本軍隊征服台灣的經過，其中第九章「大姑陷的攻擊」，描述往新莊前進的日本軍隊，被埋伏在山中的住民三方圍擊，三十名負傷，剩下數名潛入大姑陷溪中試圖撤退，但仍受到追擊，最後僅一人逃出生天，留下

などで漢化が進み、消滅した。

「新荘」とは「新興の荘街」という意味で、川沿いという土地の利で水運が栄え、かつては「千帆林立新荘港，市肆聚千家燈火」（千隻の船が新荘港に立ち並び、千の家の灯りがともる）と讃えられたほど、漢人の開墾いらい北台湾でもっとも早く開発された地域の一つだった。その後、水運の発展は対岸の艋舺へ取って代わられるが、清代後期からは鉄道も走り「海山口」という名の駅および停車場が置かれて鉄道交通の要所となった。淡水川に続く大漢渓は元の名を大姑陷河（ター・コー・ハン・ホー）といい、タイヤル族の大水をあらわす言葉に由来するが、その名の通り、たび重なる川の氾濫のため日本時代以降は鉄道要所の座を板橋に譲ることとなり、線路跡はそのまま現在の主要幹線道路である臺一甲線の一部となったのち、周辺のいくつかの地域とともに一大工業地区となっていく。

この「大姑陷」という大漢渓の元の名、日本の近代史を勉強する人のなかでは知られた単語のようで、というのも、清から台湾を割譲された日本が台湾に来た 1895 年ごろ、特に住民の激しい抵抗に遭い苦戦を強いられた場所だからだ。

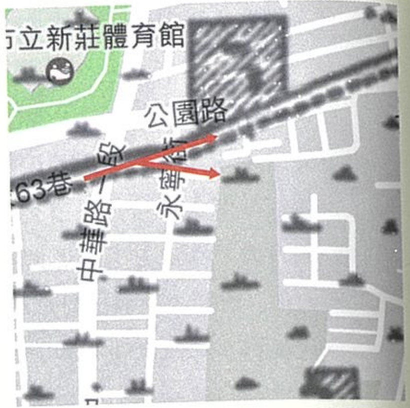
日本時代当初の日本軍による台湾制圧の様子を細かく記録した書「征台顛末」（1897 年 / 明治 30 年出版）の中の「第九章　大姑陷の攻撃」という章では、新荘に向った日本部隊が三方の山を背にした住民たちから襲撃を受

部隊告急的記錄。

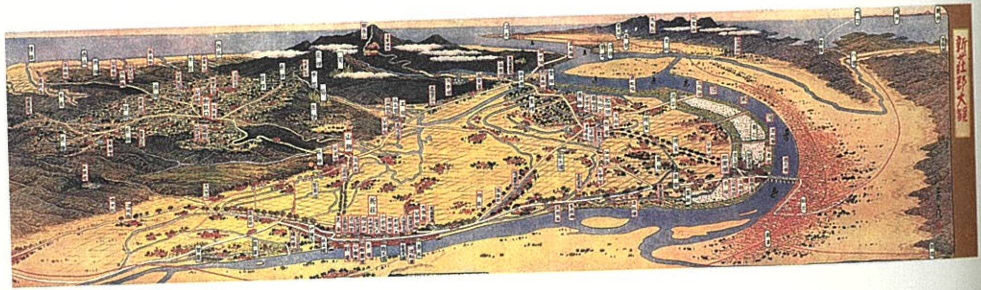
如同「海山口」的名稱所示，新莊後方的群山連接觀音山，形成面水背山的地形。搭乘捷運新莊線時，看著「菜寮」、「頭前庄」等源自台語的站名，令人聯想起這一帶曾經遍佈悠閒的田園風景，但是下車走出地面時，卻已然看不見一絲往昔的樣貌。

即使如此，在這條Y字路中，仍留下一點痕跡。

若將這一帶的地圖與「1895年台北附近地形圖」疊合，會發現當時的道路與Y字路左側道路（中華路一段63巷）重疊，可知這條小路是比穿越新莊中心地帶的中華路更為古老的道路，在新莊尚有鐵路經過時就已存在，當時道路兩側應該是整片的柑橘園或甘蔗田吧。站在小路上往觀音山眺望，應可看見綿延的茶園，其中或許還有幾股燃燒薪柴所發出的煙，正裊裊上升呢。



1895 年的地圖與現在地圖疊合
1895 年と現在の地図を重ね合わせたもの



日治時期的鳥瞰圖
日治時期の鳥目俯瞰図

けて30名もの負傷兵を出し、のこった数人の日本兵が大姑陥河の流れに潜みながら撤退するも、追撃を受けて結局ひとりだけがようやく龍譚まで命からがら逃げおおせ、部隊の危急を告げたという記録が残っている。

かつての「海山口」の名の通り、水に面し後方を観音山に連なる山に守られた新荘。いまのMRT新荘線に乗って「菜寮」「頭前荘」などの台湾語に由来する駅の名前を眺めていると、かつてそのあたりに広がっていたのどかな田園風景が思い起こされるが、地下鉄を下りて地上に出れば面影はすでにない。

それでもY字路に、微かにのこる痕跡がある。

冒頭の大胆な「出租」Y字路のいまの地図と「1895年台北付近地形図」を重ねてみると、当時の道路とY字路左側の道路（中華路一段63巷）が重なった。このちいさな通りが、新荘の中心を走る中華路よりもっと古く、新荘に鉄道が走った時代からこのあたりにあったのだ。両脇に広がっていたのはミカン畑だろうか、それともサトウキビ畑だろうか。観音山を望めば茶畑が広がり、そこには木を焼いて木炭をつくる煙が、幾筋もたちのぼっていただろうか。